

マラキ書4章「主の来られる日」

1A 燃えながら来られる方 1-3

1B 焼き尽くす火 1

2B 義の太陽 2-3

1C 癒し 2

2C 勝利 3

2A モーセの律法の記憶 4-6

1B ホレブでの出来事 4

2B エリヤの到来 5-6

1C 先駆者 5

2C 父子の対面 6

本文

今朝は、マラキ書4章を一節ずつ読んでいきます。私たちは、ロゴス東京の教会が始まって、七年が経ちましたがついに、創世記から読み進めた旧約聖書が終わりを迎えます。けれども、前回学びましたように、マラキ書は、実は新約聖書の前準備です。マラキの預言があつて、それでバプテスマのヨハネの働き、そして主ご自身が来られます。

マラキ書は、ヘブル語の聖書や新共同訳においては、3章しかありません。4章は3章の続きになっています。3章13節からの続きと言ってよいでしょう。主は1章から、何とかして、彼らが霊的に目覚めてほしい、また愛して、愛される関係を取り戻してほしいと願われて語っておられます。主が生きて働いておられることを、実生活の中で取り戻してほしいと願われているのです。ところが、彼らは霊的な倦怠に陥っていました。その数々の症状が、1章から3章までに書いてあります。そして3章13節で、彼らが主に対して頑ななことを言っているということなのです。「神に仕えるのはむなしいことだ。神の戒めを守っても、万軍の主の前で悲しんでも、何の益になろう。」とのこと。そして、「今、私たちは、高ぶる者をしあわせ者と言おう。悪を行なっても栄え、神を試みても罰を免れない。」と言いました。本当に、神に仕えること、キリストを信じ、この方に自分の人生を任せ、従っていく人生が虚しいことなのでしょうか？本当に、報いのないものなのでしょうか？単なる、宗教的な活動をして、実質のない意味のないことをしているのでしょうか？

主は、そこでご自身を恐れる者たちが、ご自分のことを語り始めている時に、それを心地よく聞いて、それを記憶の書に入れると言われたのです(16節)。つまり、主は必ず、ご自身を恐れかしくんで行なったことについて覚えていて、報いを与えられると言われました。そして、3章18節に「正しい人と悪者、神に仕える者と仕えない者との違いを見るようになる。」と言われました。ここが、今日、私たちが心に留めなければいけない御言葉でしょう。今は見えなくても、いや時に逆に見え

るようなことがあります。仕えている者が虚しくて、仕えていない者が栄えているように感じることもあります。しかし、今は見えなくとも、必ずその違いが見えて来る、明らかにされていくということでもあります。

イエス様が地上で神に仕えられた時に、無駄にその生涯が終わったかのように見えました。その行なわれた良い業に対して、報いは非常に少なく、最後は蔑まれ、痛めつけられ、殺されました。同じように、私たちが主イエス様に従っていく時に、その生涯が無駄であるかのように虚しく感じる時があります。しかし、神はその無駄な人生のように見えたイエスを、墓から、死者の中から甦らせたのです。ですから、ここに希望があります。主は必ず、すべての人を甦らせ、報いを与えられるのです。主は、必ず、今、ご自身を恐れて行なったことを覚えておられます。そして、神のことや、キリストのことなど、自分の人生に関係がない、関わっても無駄なことだとして、今、たとえ問題がないようにして生きていても、必ずその報いがあるのだということです。イエスは、新約聖書の最後、黙示録の最後で、「見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。(22:12)」と言われました。

1A 燃えながら来られる方 1-3

1B 焼き尽くす火 1

1 見よ。その日が来る。かまどのように燃えながら。その日、すべて高ぶる者、すべて悪を行なう者は、わらとなる。来ようとしているその日は、彼らを焼き尽くし、根も枝も残さない。・・万軍の主は仰せられる。・・

「見よ。その日が来る。」とあります、これは主が定められた終わりの日のことです。その日は必ず来る、主は定めておられる日だということです。まだまだではないか、と嘲る者が出て来るでしょうが、主は定めておられます。

そして、その日は「かまどのように燃えながら」来るとのことです。私たちは、主ご自身が火のような方として登場することを、聖書の中で見えています。モーセに対して、ホレブの山で、燃える柴の中から語られたことを思い出してください。火というものを思う時に、私たちは主がどのような方であるかを想像しやすいです。第一に、聖なる方です。火の中に簡単に立ち入ることはできません。同じように、主は私たちから隔絶された、被造物を超えたところにおられる方です。第二に、この方は目に見えない方です。他の神々と呼ばれているものは、自分たちで把握することができます。目で見て確かめ、触ることができます。しかし、神の御座のところには、その姿を視覚で確かめることはできません。第三に、主は光であられる方だということです。火によって光輝いています。それと同じように、主は私たちの暗闇を照らし、様々な事柄を明らかにしてくださいます。主は光の中に住まわれる方です。

ここで大事なものは、火というのは、自分が火に対してどのように接するかによって、全く異なる働

きをすることです。私たちは太陽の光によって、その光線によって体が癒されています。そして火に近づくことによって、私たちは暖まることができます。しかし、火の中に私たちが手を突っ込めばどうなるでしょうか？もちろん、やけどをします。そして残念なことに、火事などによって死んでしまう人もいます。火は、私たちに癒しを与え、暖かみを与えますが、自分たちを滅ぼすことさえします。しかし、火そのものは変わらないのです。火は火であり、その火に対してどのように接するかによって、自分の運命が変わるということです。

3章2節には、「この方は、精錬する火」とあります。主が火の中を私たちにくぐらせるようなことをさせる時があります。その時は火の中を通っても、金や銀のように精錬されるのであって、その時は辛く悲しいかもしれませんが、信仰が純化されます。主に拠り頼み、十分に安定した成熟した者となることができます。そしていま話したように、主は恵みをもって私たちに、その光を太陽の光線のようにして私たちが、日光浴ができるようにしてくださいます。私たちが礼拝の後にいつも祝福している、アロンの祝福に、そのことがよく表れています。「主が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。(民数 6:25)」主は、今は恵みをもってすべての人に接しておられますね。「天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。(マタイ 5:45)」しかし、太陽のような恩恵を神から受けているにも関わらず、高ぶって、神はいない、神は必要ないと言っているなら、それが、ここで話している頑なな者たち、高ぶる者たちです。

そこで火が、そのような者たちを滅ぼすことも行ないます。同じ火なのですが、その火を、恵みを持って受け入れなければ、自分を滅ぼすことにさえなります。ここに書かれているとおりです、「すべて高ぶる者、すべて悪を行なう者は、わらとなる。来ようとしているその日は、彼らを焼き尽くし、根も枝も残さない。」主が、機嫌が悪くなり、ころころ態度を変えるのではないということ。主は恵み深い方であり、真実であり、憐れみに満ちておられるのですが、自分が頑なになり、自分が主の恵みを拒むので、その罪と頑なさが自分に対して害を及ぼすのです。そして、立ち返らなければ自分に滅びをもたらすのです。

ところで、新約聖書、福音書が、このような日が来るということを宣言することによって始まっていることを思い出してください。バプテスマのヨハネが、宣べ伝えました。「マタイ 3:10-12 斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。私は、あなたがたが悔い改めるために、水のバプテスマを授けていますが、私のあとから来られる方は、私よりもさらに力のある方です。私はその方のはきものを脱がせてあげる値うちもありません。その方は、あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります。手に箕を持っておられ、ご自分の脱穀場をすみずみまできよめられます。麦を倉に納め、殻を消えない火で焼き尽くされます。」私たちが初めにすることは、悔い改めです。

2B 義の太陽 2-3

1C 癒し 2

2 しかし、わたしの名を恐れるあなたがたには、義の太陽が上り、その翼には、癒しがある。あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のようにね回る。

「しかし」という言葉から始まります。しかし、という言葉が聖書で見たら注目してください。主が、ここでご自分が本当にお語りになりたいことを対比させて、語っておられます。主が、かまどのように燃えながら来られるのですが、しかし、主を恐れる者たちにはそれは義の太陽なのだということです。確かに報いがない世界に見えます。たとえそうであっても、主を恐れ敬います。主が報いてくださる方であることを信じるのです。「信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならぬのです。(ヘブル 11:6)。そういった者たちが集まって語り合っているだけで、それでも主が聞いてくださって、必ず報いてくださいます。

「義の太陽が上る」ということですが、聖書はこの世を、暗闇として表現しています。人が自分勝手に生きている世界。人が希望を持っていない世界。罪の中に、不義の中に生きている世界です。しかし、主は希望の光を与えておられます。それは、闇の中に輝く光であり、星のようなものであることを教えています。そして夜が更けて、本当に更けてきた時に、いかがでしょうか、午前四時ぐらいまで起きている方は、ほんの少し「もしかしたら明るくなっているのではないのか？」と体感で分かる時があるでしょう。そしてその夜空を見ると、そこには金星が、明けの明星があります。明けの明星が来れば、そうしたら日が昇るのは間近です。そこで、使徒ペテロが、イエス様が明けの明星であることを話しています。「2ペテロ 1:19 また、私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜明けとなって、明けの明星があなたがたの心の中に上るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。」私たちは、今の時代は明けの明星であるイエス様を見えています。まだ外は暗いです。しかし、預言の言葉にある確かさ、それに目を留めるとよいのです。そこに、後には一気に朝が来て、太陽が昇る時を期待することができます。そして、太陽が昇り切る時が来るのです。青空が広がる時がきます。それが、神を王とする国です。

そして、その太陽は、「義の太陽」と呼んでいます。さらに、太陽が軌道の中で動く姿を、まるで鷲が飛んでいるように翼を持っているかのように表現しています。そこには、「癒し」があるということです。義、あるいは正義というのは、真っ直ぐという意味です。本来あるべき姿です。そして不義、正しくないというのは、本来あるべき姿がバランスを崩して曲がってしまっている状態です。本来真っ直ぐにされている世界が、太陽の光線が至るところに広がっているように広がっているならば、私たちの体は日光浴をするように癒されます。

イエス様は、その正義を驚くべき方法でお見せになりました。それは、私たちの咎、私たちの罪のために、身代わりに傷を受け、打たれることです。「しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために

刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。(イザヤ 53:5)」このようにして、イエス様は神の義を表してくださいました。私たちが受けなければいけない処罰を、ご自身の体で受け取ってくださったのです。ですから、罪が赦され、魂が癒され、体も癒されます。甦られた主は、自分の激しい苦しみの後を見て、満足されました。「わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を彼がになう。(53:11)」この方がまっすぐで正しいだけでなく、私たちの咎を身代わりに受けてくださったことによる、究極の癒しを受けているのです。私たちがもはや、自分の咎によって責められることのない世界、赦され、解放された世界にいるのです。ですから、この救いを喜んでいる姿を、「牛舎の子牛のようにね回る」と表現しています。

2C 勝利 3

そして主を恐れる者は、癒されるだけでなく、勝利を得ます。3 あなたがたはまた、悪者どもを踏みつける。彼らは、わたしが事を行なう日に、あなたがたの足の下で灰となるからだ。..万軍の主は仰せられる。..

踏みつけるとか、足の下で灰となるという言葉は、圧倒的に勝利する、征服するという意味合いを持っています。蛇がエバを惑わして、それでアダムが罪を犯した時に、主は蛇に対して言われた言葉があります。「彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。(創世 3:15)」これは、キリストについての預言です。サタンが、その闇の力でイエス様を十字架に付けるように仕向けました。しかし、それは踵に噛みつくようなものであり、実はその十字架によって、サタンの頭を踏み砕いていたというものです。サタンがキリストを滅ぼそうとした試みが、実は自分自身の脳天を打ち砕くことであったということです。

圧倒的な悪を目の前にして、不正義や不条理を目の前にして、人々の心は打ちひしがれます。しかし、主は必ず報いてくださる時を定めておられます。教会の中に、分裂とつまずきをもたらしている者たちがいるから、警戒しなさいと使徒パウロは、ローマ 16 章で話しました。そして、こう言っています。「あなたがたが善にはさとく、悪にはうとくあつてほしい、と望んでいます。平和の神は、すみやかに、あなたがたの足でサタンを踏み砕いてくださいます。(ローマ 16:19-20)」主は、必ず目の前にある悪に対して、自分たちを阻んでいる者に対して、速やかなる裁きを行なってください。悪に対して勝利を与えてくださいます。

ここで「悪」とは何かを思い出してください、それは、主に仕えたところで無益であるというあざけりです。主に情熱を向けることに対して、それを愚かなことであり、特段に神のこと、キリストのことを考えなくとも自分たちは生きられるとしている高ぶりです。主にあって生きても、何も良いことはないという倦怠感、私たちは時に強く押し迫って来るのではないのでしょうか？主は、この敵を必ず、皆さんの足の下で踏みつけてくださいます！

2A モーセの律法の記憶 4-6

こうして、主は必ず、ご自身を恐れるものを報いてくださり、そうでない者との違いを明らかにされることを教えてくださいました。次は、主がマラキを通して旧約時代において、最後に語られるしめくりの言葉です。

1B ホレブでの出来事 4

4 あなたがたは、わたしのしもべモーセの律法を記憶せよ。それは、ホレブで、イスラエル全体のために、わたしが彼に命じたおきてと定めである。

主が命じておられるのは、モーセの律法です。それは、彼らに主がホレブの山、すなわちシナイの山で語られた時の教えであります。それはそれは、恐ろしいものでした。山の上に雷と稲妻、密雲があり、角笛の音が高く鳴り響き、宿営に地響きが鳴りました。全山は煙っており、激しく震えています。そこで神が声を出して語られたのです。十戒でありました。わたしのほかに、神々があってはならない。自分のために偶像を造ってはならない。主の御名をみだりに唱えてはならない、安息日を守れ、父母を敬え、殺しなかれ、姦淫するなかれ、盗むなかれ、偽証するな、貪るな、というものです。その時に民は、自分たちが死ぬかもしれないと思いました。火の中から語られる生ける神の声を聞いて、なお生きていることが奇跡だと言いました。それで、モーセが山に近づき、神から聞いてくださいと願ったのです。その時に、主はモーセに言われました。「主はあなたがたが私に話していたとき、あなたがたのことばの声を聞かれて、主は私に仰せられた。「申命 5:28-29 わたしはこの民があなたに話していることばの声を聞いた。彼らの言ったことは、みな、もつともである。どうか、彼らの心がこのようであって、いつまでも、わたしを恐れ、わたしのすべての命令を守るように。そうして、彼らも、その子孫も、永久にしあわせになるように。」

そうです、主のお姿を見て、主を恐れかしこみ、そしてその命令を真剣に受け止めるということ、この生きた神との関係を記憶しなさいということです。これは、イエス様の恵みと矛盾しません。使徒ヨハネは、「律法はモーセによって与えられ、恵みとまことばイエス・キリストによって実現したからである。(1:17)」と言いましたが、イエス・キリストの恵みとまことを知るには、モーセの律法がまずどのようなものかをはっきりと知る必要があります。イエス様が言われました、「マタイ 5:17 わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思ってはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。」そして、「律法学者やパリサイ人の義にまさるものでなければ、あなたがたは決して天の御国に、はいれません。」と言われたのです。主が殺してはならないと命じられていることは、兄弟に敵意や憎しみを抱いたら、すでに殺していることになります。姦淫してはならないと主が言われている時に、心の中で情欲をもって女を見たならば、それで姦淫を犯したことになるのです。そしてイエス様は、「あなたは最高議会に引き出されます」「あなたの右の目がつまみかせるなら、抉り出さなさい。全身がゲヘナに投げ込まれるよりましなのです。」と言われました。そう、モーセの律法を守っているつもりで、実は律法にある主の思いや心から離れているということは、多々あるのです。

律法の意味が分かった時、ちょうど神殿の前にまで来て、天に目を向けることができず、胸を叩いて、「神さま、こんな罪人の私をあわれんでください。(ルカ 18:13)」とへりくだった、取税人の心と一つになれます。イエス様は、この男が義と認められたと言われています。

2B エリヤの到来 5-6

1C 先駆者 5

5 見よ。わたしは、主の大いなる恐ろしい日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。

再び、「見よ」という言葉が出てきました、主が燃えるかまどのように来られる恐ろしい日が来る前に、エリヤを先駆者として遣わすと主は言われます。エリヤの働きを思い出してください、アハブがイゼベルと結婚し、バアル崇拜をイスラエルに持ち込んだ男のところに、ノーを突き付けた預言者です。イスラエルの国が、飛行機が地面に墜落するように、靈的に一直線に滅びに向かっている時に、それに待ったをかける人として、神に用いられました。そしてイスラエルの民が、「主こそ、ヤハウエこそ神である」とひれ伏すことができたのです。

そして新約聖書は、福音書がみなバプテスマのヨハネの働きから始めています。彼が生まれる前に、御使いガブリエルが彼の父となるザカリヤに、こう言いました。「そしてイスラエルの多くの子らを、彼らの神である主に立ち返らせませ。彼こそ、エリヤの霊と力で主の前ぶれをし、父たちの心を子どもたちに向けさせ、逆らう者を義人の心に立ち戻らせ、こうして、整えられた民を主のために用意するのです。(ルカ 1:17)」バプテスマのヨハネ自身が、エリヤではありませんでした。エリヤに働かれた神の御霊とその力が、彼にも働くということです。

イエス様が弟子たちの質問に答えられました。彼らは、「まずエリヤが来るはずだと言っているのは、どうしてでしょうか。」このマラキの預言をもって、イエス様が主ではない、キリストではないと弟子たちに論じました。イエス様が答えられました。「マタイ 17:11-12 エリヤが来て、すべてのことを立て直すのです。しかし、わたしは言います。エリヤはもうすでに来たのです。ところが彼らはエリヤを認めようとせず、彼に対して好き勝手なことをしたのです。人の子もまた、彼らから同じように苦しめられようとしています。」エリヤは来る、すべてを立て直すと言われています。けれども、既に来たのですとも言われます。完全に矛盾しています。けれども、弟子たちは理解しています。エリヤは、将来来るのです。けれども、エリヤと同じ御霊と力がバプテスマのヨハネに働いておられたのに、それを認めないで、好き勝手なことをしたのだと言われます。彼は、ヘロデ・アンティパスによって殺されました。

つまり、主が来られるのは二段階あるということです。主は既に来られました。その前に、バプテスマのヨハネが来ました。彼を拒み、さらに主ご自身も拒みました。けれども、主は甦られました。そして天に昇り、今、天に留まっておられます。そしてそこから戻って来られるのです。主は再び、来られるのです。その時には、エリヤの霊と力ではなく、エリヤ本人が確かに戻ってきます。黙示

録 11 章を読むと、エルサレムの神殿が建てられています。けれども、エルサレムはエジプト、ソドムと呼ばれています。なぜなら、霊的に退廃しているからです。そこに二人の証人が出てきます。その姿は、エリヤまたモーセのようです。預言をしたら、雨が降らないようにできるし、水を血に変えることができます。火が彼らの口から出てきます。彼らは殺されるも、三日半後に生き返り、天に引き上げられます。そして、彼らの働きによって、生き残っている人々が神をあがめたとあります。こうやって、神に人々を立ち上がらせる働きをしています。

そして、この同じモーセとエリヤが、イエス様が高い山で栄光の姿に変貌した時に現れて、イエス様がエルサレムで十字架に付けられ、甦られることについて、一緒に話していました。モーセの関心事も、エリヤの関心事も、イエス様が十字架に付けられることについて、最大の関心を持っていたのです。なぜなら、十字架において、律法を違反することによる呪いを受けてくださるからです。この方が、律法の要求する死を受けることによって、律法を全うされようとしているからです。それによって、まったく異なる世界が、つまり、律法がキリストの死によって成就したので、神の恵みが人々に注がれ、アブラハムの祝福が御霊によって注がれるという時代が来ることを示していました。皆さんはいかがでしょうか、自分の罪や咎が、キリストの死によって取り除かれたことを信じているでしょうか？受け入れているでしょうか？本当に受け入れているなら、そこには神の御霊によって、豊かな恵みと祝福が注がれます。

2C 父子の対面 6

6 彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。それは、わたしが来て、のろいでこの地を打ち滅ぼさないためだ。」

前回、ここの箇所に触れましたが、父と子がそれぞれ心を相手に向けるという働きがあるのは、終わりの日に、父や子、兄弟などの間で殺し合いさえ起こることが、終わりの日に預言されているからです。しかし、エリヤの働きによって、その関係が回復するということです。ここには、単なる父子の関係以上のものがあります。互いに向き合うということ、これが、モーセが主に対して行っていたことです。「モーセのような預言者は、もう再びイスラエルには起こらなかった。彼を主は、顔と顔を合わせて選び出された。(申命 34:10)」主に対して顔を合わせられる関係だったのです。神が父、自分は子、どちらも顔を合わせています。

私たちは、顔を合わせることができているでしょうか？自分自身に向き合い、そして主ご自身の言われていることに向き合っているでしょうか？家族でどこかで、向き合うのを避けているように、神に対してもどこかで避けていないでしょうか？それが、マラキの預言の始まりでした。そのまま、主に向き合っていないからこそ、神の愛を疑い、いい加減ないけにえになってしまったのです。主と向き合う時に、人との関係にも平和が来ます。そして、主の呪いはそこで止まります。